

4. 閉会挨拶



片田 敏孝（群馬大学大学院 教授）

どうもありがとうございました。パネルディスカッションのお話を伺いながら、最初の頃の防災教育の議論との違いを実感しております。具体的な防災教育のテクニカルな話なんか一つも出てきません。もちろん、それも重要は話なんですけど、教育技術という部分だけではなく、防災教育に関わる者としての心のあり様、子どもたちを育むといことはどういうことなのか、指導する者としての心の持ちようのようなことを深く議論できたかなと思います。

昨日の議論の中で、防災教育の効果がいろんなところに及ぶという話があった。道徳教育だとか、人権教育とか、〇〇教育など、いっぱい出てきたわけですけども、全部防災教育の中に含まれているという認識は、みんなでも共有できているように思うんですね。今日の議論にもあったように、防災は「自分の命は自分でちゃんと守れる」ということなんでしょうけども、それができるためには何が必要なのか。もちろん知識も必要。そして、真っ先に逃げるという思いも必要。そうなんですけども、その裏側にもっと大事なことがあることに我々は気付いているように思います。

釜石でいろんなことをやってきましたが、それでも大震災によって多くの方が亡くなってしまいました。若き消防隊員が、寝たきりのおじいちゃんを助けに飛び込んで行って亡くなっている。ある若者は高台まで駆け上がってきて、じいちゃんの姿を確認できない。すると彼は戻って探しに行き、その

まま帰らぬ人になっている。お母さんは、津波が来ると言うからこそ懸命に子どもを探して命を落としている。こういう状況を見ると、知識も必要、思いも必要だけど、最後「人は人として逃げられないんだ」ということを凄く痛感するわけです。お母さんが子どもを懸命に探して死んでいく。その人として言わば当たり前の行動によって、被害を拡大している。そういう問題もクリアして行って、初めて防災の実効性があるんだと気付くわけです。

実効性を高くするためには、事前にそういう状況を考えることが必要になる。「親は自分のことをどう思っていてくれるのか」、「その思いに対して自分がどう振る舞うべきなのか」と、『命を守る』という観点から、家庭のこと、地域のこと、弱き子どものこと、そして、「どう生きるか」ということまで含めて、凄く幅広い問題を防災教育は扱う必要がある。その結果として、学力向上などいろんな効果が出てくる。その実感は僕らは今共有しているわけです。何とかこれをものにしていきたいと思っています。でも、『防災教育』ともう言いたくないなど、正直思うわけです。『防災教育』のラベルを貼った段階で、一般的なイメージとして『逃げる逃げる教育』に矮小化されてしまい、それが社会的に定着してしまっている。

今日の議論でもわかるように、もちろん、逃げる、命を守ることは、防災教育の一番の根源としてあるんだけど、そこから得られるいろんな副次的な効果が、これほどまで本質的なところに及んでいて、波及していく効果がいっぱいある。それに気付いた時に改めて、日本の教育のあり様に及んで考え抜いていきたいと思うわけです。そのためにはもうちょっと時間が必要だなと思います。実践も必要。それを報告し合いながら、その先に見えるものを皆で掴みたいという思いがあります。メンバーを拡充していきながら、組織を維持していき、いろんな議論を重ねて、おぼろげに掴んでいるものをしっかり形にして、先につなげていきたいなど、今日思いを新たにしました。

これまでの議論の中で、実践的な部分について感じ取ったことを追加的にお話させて頂きたいです。

このメンバーの多くは、学校の教師として子どもたちの前に立っておられる。目の前に子どもたちがいますから、「目の前の子どもたちに対する防災教育をどうするか」、そこに当然思考がいくわけなんですけども、狭く考えて頂きたくないなと非常に強く思っています。

先ほど森本先生のお話の中にもありましたが、釜石の子どもたちは、もう間もなくすると、大学卒業して社会に出るような年になるんですよ。あの震災を経て、今子どもたちが何を思っているのか。おそらく震災を経験したからこそ、地域に対する思いやいろんな思いを持ってきている。例えば、美容師になりたいと言っている子も、「地域の皆が集まれるような場所をつくりたい」と地域への思いを持ってきている。あの震災を経験したからこそ、「次の釜石に自分はこう貢献するのか」とか、「前の釜石よりもいい釜石にしたい」というそんな思いが、子どもたちの心の中に満ち溢れているように思えますよね。

防災教育は、先生方にすれば毎年毎年のルーティンワークでしょう。4月になり、新しい子どもたちが目の前に来ました。一年間、この子どもたちを成長させて、次の学年に送ってやる、次の学校に送ってやる、と考えておられると思うんです。先生方にとってはルーティンワークかもしれないけど、5年、10年と続けていくと、小学校6年生12歳の子が22歳になるように、市民を作っていることになる。

よく行政の方々は、「釜石の将来をどう描くか」、「将来の釜石のビジョンはどうか」なんてことを考えるわけなんですけど、それをやるんだったら、10年後の釜石市民、つまり目の前の子どもたちを見てくれと言いたい、「この子どもたちをどう育むんだ」と。子どもたちを将来のビジョンに見合うように教育していくことを考えたほうが、よっぽど早いですよ。固定観念の強い大人たちは、防災講演会をやってもきやしない。大人たち相手に一生懸命躍起になるよりも、スポンジのように吸収してくれる子どもたちに、「生きるとは」、「防災とは」、「災皆に向かい合うとは」、「弱者に対する配慮とは」ということをしっかりと10年間教える。それにより、立派

な大人たちを地域に輩出できます。さらに10年頑張ると、彼らはぼちぼちお父さんお母さんとなる。そんなお父さんお母さんが次の世代を育ててくれる。

こう考えると、防災教育を教室座学とコンパクトに考えて頂きたくないんですよ。地域の将来をどう作るか、先生方が毎年やっておられることは、その一部なんです。学校も『育みの環境』の一部ですから。むしろ、地域の大人たちに対して、「学校でこれだけやっても、あなたがそんなんじゃないか、教育効果も出やしないじゃないか」と訴えて頂く。そこまで先生方にして頂くべきかどうか、わかりかねる部分もあるんですけども、行政として非常に大きな仕事だと思います。

黒潮町が非常にうまくいっているのは、町長が思いつき前を見ておられます。町長も率先して、「34.4m、こんな津波に負けるか」、「へこたれてどうするんだ」という思いの中で、「絶対に津波に負けない町にするんだ、犠牲者ゼロにするんだ」という明確な方針を示している。そして、町長の命を受けた教育委員会が、「そんな将来の黒潮町民を作るんだ」と燃えておられる。学校の先生方も教育現場で燃えておられる。黒潮町は34.4mを味方に、皆が将来の黒潮町を見据えていますね。いつかは来るんでしょう。そんな大きいかわからないんですけども、いずれ来ますよ。でも、「黒潮町民は絶対に負けない」、「そんな町民を作っているんだ」という思いの中で、皆が前を向いているわけですね。黒潮町、めちやくちや明るいじゃないですか。

これを見る時に、僕らが先生方に是非お願いしたいのは、防災教育を教室座学と考えると頂きたくないということなんです。継続することで、市民を作り、いずれお父さんお母さんを作り、そして文化を作っていく。そんなことばかりも言っていられない部分もあると思いますけど、「地域を作っているんだ、町を作っているんだ」という、そんな壮大な思いの中で、日々のその教育にあたって頂けるといいなと思います。

これは、地域の将来、町の将来、未来を決定付ける非常に重要な仕事です。町政、市政の核なんじゃないのかと僕には思っています。であるならば、学



校や教育委員会だけにこの仕事を任せるなど。そう考えると、先生方は主に学校という現場におられるわけなんですけども、そこでやっておられる仕事のその意義の大きさ、その意味の大きさ、将来に向けての重要性ということを考える時に、どうか行政を巻き込んで頂きたい。本来であれば今日もここに防災の危機管理の職員や地域戦略部の部長のブレインが半分位いるべきなんだろうと思います。いずれ、僕らはそんな方向まで目指せるといいかなと思っています。そのためにも、今日議論して頂いたことを踏まえて、この先に向けて、皆さんとの共有意識をしっかりと形にして発信し、そして仲間を増やしていく、そんな方向に展開していければなと思っています。

ひとまず今回をもって文部科学省からのご支援を受けたプロジェクトは終了と致しますが、何とか先生方との連携は保ち続け、なおかつ広げていきたい。そして、今度は先生方だけの広がりではなく、できるならば子どもたちの交流が図れるように、このプロジェクト持っていけるといいかなと思っています。それが、大きな教育効果をもたらすということをお察ししておりますので、何とかそんな方向に、このプロジェクトを拡張していけるといいなと思っ

ています。そのためにはいろいろ乗り越えなきゃいけないハードル、準備しなきゃいけないものもあり、話題性も作っていかなきゃいけないんですけども、少なからずもここにおられる方々は、その核になって頂きたい方々ばかりですので、どうかご支援を続けて頂きたい、参加し続けて頂きたい、ここに思いを寄せ続けて頂きたい、思っております。今後の展開については、まだ決まりきってないことがありますので、改めてご連絡することになろうかと思えます。そうなった暁には、また積極的に参加して頂きたいと思っています。

3年間、どうもありがとうございました。この成果は、文部科学省にも報告を致します。そして、自慢しようと思えます。本来ならば5年続けるプロジェクトだったんだけど、3年で当初の目標は十分に達成できたんだと、胸を張って次のステップに向かいたいと思っております。